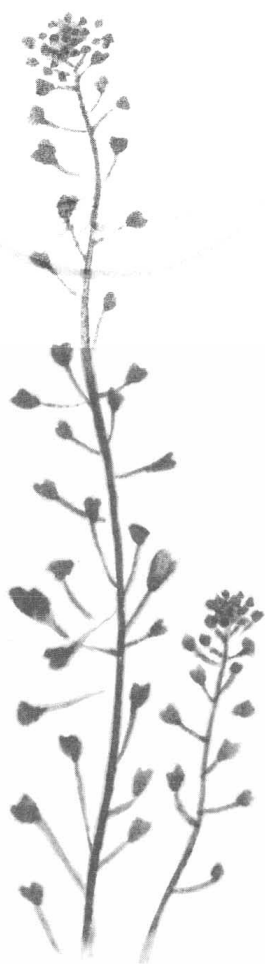


まぼろしの橋

三浦哲郎



まぼろしの橋

昭和四十七年五月一日 第一刷
昭和四十七年七月二十五日 第五刷

定価 五八〇円

著者 三浦哲郎

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

102 東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五一二二一

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1972 Tetsuo Miura

Printed in Japan

0093-302390-7384

まぼろしの橋

装帧
加倉井和夫

一

ドアを開けようとして、霞かすみはためらった。やはり、ノックをしなればいけないだろうか。

自分の部屋へ入るのに、わざわざノックをするなんて、と彼は思った。なんだかばかしい気がする。

ドアの横の柱には、設計一課 霞五郎、京谷慎一きやうこと書いた名札が二枚並んでいる。自分の部屋といっても、同僚の京谷と二人で寝起きしている部屋であったが、普段はお互いに、部屋へ入る時いちいちノックなどする紳士風な習慣はなかった。もう三年越し、工事現場の宿舎ではずっと一

結の部屋で暮してきた仲である。他人行儀も、遠慮もいらない。

けれども、きょうは、普段のようにはいかなかった。部屋のなかには、若い女が、一人いる。しかも、それが下着一つで霞のベッドに眠っている。

二時間ほど前までは、確かに女は眠っていたが、いまも眠りつつけているかどうかは、ドアを開けてみないことにはわからなかった。部屋のなかからは物音一つきこえなかったが、もしかしたら女はもう目醒めていて、ぼんやり天井をみつめているかもしれない。あるいは、ベッドの上に起き上って、いつのまにか脱がされている自分の衣服がどこにあるのか、部屋のなかを見廻して、捜しているかもしれない。

女が眠っていればいいのだが、あられもない恰好で起き上っているところへ、いきなり入っていくことになる、と、困る。そうでなくても疲れ切っている女を、無駄に驚かすのはよくないし、その上、女に物欲しげな男だと思われるでもしたら、面白くないことおびただしい。

霞は、なにやら照れ臭いことをするときの癖で、ちょっと鼻腔をふくらまして、吐息をした。

「入るよ。いいね？」

ドアのむこうへそう声をかけて、ここは自分の部屋なのに、と彼は思った。

相変らず、強い雨の音がプレハブの宿舍を包んでいた。

彼は耳を澄ましていたが、女の返事はきこえなかった。するとまだ眠っているのだろうか。ドアを細目に開けてみると、ベッドの足元の方から、寝ている女の白い顔がみえた。その顔は、枕の端に傾いたまま動かなかった。彼は、ドアを半分開けたままにして、なかへ入った。

女は、やはり眠っていた。どこか苦しいのか、それとも辛かった昨夜の夢でもみているのか、すこし眉根を寄せている。枕元の、カーテンのない窓の曇りガラスから染み通ってくる雨の色のせい、女の顔は相変らず透き徹るよう白かった。今朝は気がつかなかったが、こんもりと盛り上った鼻梁のあたりに、雀斑がぱらっと浮いている。口元が弛んで、今朝よりはいくらか血の色が戻っている唇の間から、艶を失った歯が石膏のような白さで覗いていた。

彼は、今朝早く、起きぬけに女をみた時、誰かに似ている、自分が前に会ったことのある誰かに似ている——そう思ったことを思い出した。

今朝の女は、芯から疲れ切っていて、骨が折れたようにぐらぐらする頭を両手で支えてやらなければならなかった。

目は、ただ見開いているだけで、夜明けのひかりを集めているちいさな水溜りのようだった。それでも、女は、男の声に励まされるたびに、眉根を寄せて目に力を籠めようとした。

誰かに似ている、と霞が、初めてそう思ったのは、そんな女の顔をみた時である。ちいさめな顔の輪郭といい、寄せた眉根の感じといい、切れ長の、目尻がすこし上った目やまなざしの強さといい、確かにどこかで見覚えのある女のような気がする。

けれども、それがどこの誰やら、わからなかった。いまここに寝ている女が、どこの誰やらわからぬように。

クレール車でも誘導するのか、雨のなかにホイッスルの音が響いていた。霞は、自分が心にもないことをしていたことに気がついた。彼は、女の寝顔を眺めに部屋へきたのではなかった。カーディガンを、トックリのセーターに着替えにきたのだ。

彼は、ついでに持ってきてやった女のチェックのシャツと、紺のスラックスを、足元の方の掛布団の上に置いた。

それから、自分の衣裳戸棚をそっと開けて、ナフタリン臭いセーターを取り出した。

まだ九月の末だったが、山には秋が駆け足でやってくる。

雨降りの日など、日暮が近くなると一分刻みに冷えこんでくるのが、はっきりわかる。

着替えていると、背後でベッドがかすかに軋んだ。彼はセーターから首を出して、振り向いてみた。女は壁の方へ寝返りを打っていた。すこし赤味を帯びた豊かな髪が、枕の上に波打っている。彼は、ちょっとした間みつけていたが、女はそれきり動かなかった。

「目が醒めたのかい？」

彼は、着替えを済ませてから、声をかけてみた。女は返事をしなかった。さつきからずっと眠ったままなのか、目が醒めていてもそうしてじっとしているのか、彼には判断がつかなかったが、

「ちょっと着替えをしようと思つてね。ついでに、シャツとスラックスが乾いていたから、持ってきてやった」

と彼はいった。けれども、女は身じろぎもしない。彼は、鼻腔をひろげて吐息した。

「まあ、ゆっくり眠るさ」

彼は独り言のようにそういつて部屋を出た。

事務所に戻ると、經理の斎木がぼつんと一人で、老眼鏡の玉を拭いていた。

「どうですか、まだ眠ってますか、お嬢さんは」
斎木は、眼鏡を外している時でも、眼鏡越しに相手を見る癖が出る。

「眠ってますね、相変らず」

「随分眠るな。もう十時間近く眠っている」

斎木は、机の上の懐中時計を手を取つて、ネジを巻いた。
「まさか、睡眠薬を嚥（の）んでるんじゃないでしょうな、あの娘」

霞は、ちょっと驚いて斎木をみた。

「まさか。ゆうべは、ほとんど眠ってなかったんでしょ、きつと」

「そうすると、ゆうべは夜通し歩いてたんですかねえ、あの雨のなかを」

「……まあ、大きい木の下で雨宿りぐらいはしたかもしれないけど、ともかくここまで辿り着いたんだから」

と霞は窓の外に目を投げていった。

今朝のしらしら明けに、ぐしょ濡れになった女が器材置場の軒下にうずくまって、ほとんど意識を失いかけているのを、川の様子をみに早起した人夫頭がみつけた。女は運がよかったのだ。

「それにしても、無茶なことをするなあ、近頃の若い娘

は」

と斎木はいった。

「もしもわれわれがここで工事してなかったら、どうするつもりだったかねえ」

「どうにかするつもりでも、どうにもならなかったろうな。多分、いまごろはもう生きてなかったでしょう」

霞は、煙草に火を点けると、窓から雨に打たれている架橋工事の現場を見下した。谷川は、白く濁って、大分水嵩を増している。工事はそろそろ終りに近づいていて、雨のなかに橋骨の赤葡萄酒色だけが鮮やかである。

「全く、わざわざ死にきたようなものだ。女が一人で、しかもあんな軽装で秋の山へ登ろうなんて……」

斎木はいった。霞もそれには同感だったが、そのまま黙って現場を見下していた。すると、斎木がまた、

「あの娘、本当は、死にたかったんじゃないのかな」

「……そうですかねえ」

霞は、笑いながら窓辺を離れた。

「そうすると、助けた俺たちが恨まれることになる」

「だって、そうとしか考えられませんか。これはまちがいなく、自殺行為ですよ」

霞は、椅子に腰をおろしてゴム長を履いた。

「まあ、いずれにしても、彼女は死なずに生きてるんですからね。このまま、そっと山を降りて貰いましょうや。本当に死にたいんだったら、いずれまた、なにか方法を考えるだろうし」

霞がそういうと、斎木は笑い出した。

「死にたい奴には死なせておけ、ですか」

「そういうこと」

「そういう冷たいことばかりいつてるから、なかなか嫁さんがみつからない」

「みつからなくて、結構なんだ。こっちは欲しくもないんだから」

「女嫌いもほどほどにしないと」と斎木はいった。「齢をとってから後悔しますよ。もうそろそろ三十でしょう？」

「まだ二年ありますよ」

「そんな強がりをしてないで、一つ、相談に乗ってやったらどうです？」

「相談？ 誰の？」

「あんたのベッドで眠ってる人ですよ」

霞は、ちいさく噴き出した。

「大きなお世話、といいたいですな。あんな甘ったれば、まっぴらなんだ」

彼は、壁の雨合羽を一つ取って、腕を通した。

「現場？」

「うん、すこし水が出たようだから」

斎木は微笑して、長い顎を横に振った。

「いつてらっしゃい。あんたは橋と心中でもするんですな」

「そうしよう。それが一番性に合ってるみたいだ」

霞も笑いながら、ヘルメットをかぶった。

現場をひと廻りしてきて、裏手の坂道伝いに炊事場の窓の下を通ると、不意にその窓ががらりと開いて、炊事婦の坂下かねの顔が覗いた。

「霞さん、今夜は豚汁イシジルですよ」

かねは、反っ歯をまる出しにしてそういった。

「そう。そいつはありがたいな」

霞はちよつと笑ってみせて、歩きかけたが、すぐ立ち止まって、窓を閉めようとしているかねに、

「……どうした？」

と自分の部屋の方を指さして訊いた。

「女の人ですか？」

「うん。……起きてこない？」

「まだ眠ってるらしいですよ。さっき京谷さんが覗いてきて、そんなこと言ってましたから」

「京谷が？ 帰ってるの？」

「ええ、ついさっき帰られましたよ」

京谷は、きのうの午後から休暇を取って山を降りていて、今夜帰ることになっていたのだ。

「で、いま、どこにいる？」

「事務所じゃないですかねえ。斎木さんとなにか話しこんでいたようですよ」

女のことを話しているのだ、と霞は思った。二人とも話好きだから、斎木が早速京谷に留守中の出来事を報告して、二人で女のことをあれこれと詮索しているのだろう。

案の定、事務所へ廻ってみると、満ち足りたように顔をつやつやさせた京谷が、霞をみるなり、

「美人じゃないか」

といった。

「まだ眠ってるんだって？」

「多分な。みているうち、ぴくりとも動かなかったから。眠ってるか死んでるか、どっちかだ」

「死んじやないよ。寝返りを打ったもの」

「寝返りを？ おまえ、そばでみていたのか」

「みていたわけじゃないが、このセーターを着にいったとき、ベッドが音を立てたんだ。みたら、寝返りを打っていた」

「とか、なんとかいって、時々顔を拝みにいってたんじゃないのか？」

「馬鹿をいえ。そんな暇があるもんか」

「厚着をしてきては汗をかき、汗をかいてはまた着替えにいったんじゃないのか？」

馬鹿な、と霞は笑ったが、現場を廻っているうちに實際顔も軀も汗ばんでいた。彼は、合羽を壁に掛けるとき、ジャンパーの袖でそっと額の汗をぬぐった。

「ところで、今夜はどうなるんだ？」

京谷がいった。

「なにが？」

「俺たちの寝床だよ。あのまま、あの娘さんに占領されっ放しなのかい？」

そうか、と霞は思った。女にベッドを提供するとき、今夜のことまでは考えなかった。

「俺のベッドは空いているからな」と京谷はにやにやしながらいった。「みんながそれでもいいということになれば、俺は俺のベッドに寝ても一向に差し支えないんだが

……」

「そうは間屋が卸さないね」

と斎木がいった。

「そうだろうな。それじゃ、やっぱり俺たちは宿なしってことになるわけだ」

「まあ、もうすこし様子をみてみようよ。寝るまでにはまだ大分間がある」

霞はいった。

「仕方がないな。いざとなったら、誰かのところへもぐり込むとするか」

京谷はネクタイを弛めながら立ち上った。

「馴れない恰好をすると、肩が凝るよ。俺も着替えをしてきたいんだが、構わないだろうな」

「なにも、俺に断わることはないさ」

と霞は笑っていった。

「女一人が間に入ると、仲間も忽ちかくの如しだ。当人はただ眠っているだけなのに、もう悶着の種を播いている。女って、厄介なものだな」

京谷はそんなことをいいながら背広の上着を脱いで、宿舍へ通じる渡り廊下の方へ出ていった。

その京谷が、まだ部屋から戻ってこないうちに、東京の

本社から電話があった。斎木が取って、しばらく話していたが、不意に、

「霞さんですか？　霞さんならここにいますよ」

霞は、（俺？）と指で自分の鼻先を軽く叩きながら、立っていった。

「本社の配島課長」

ああ、先輩か、と霞は、ひとりでに頬が綻んでくるのを覚えながら受話器を耳に当てた。配島雷太は、霞が学生時代から私淑していたおなじ工業大学の先輩である。

「霞です。しばらくです」

「随分会わないな。元氣か」

「元氣ですよ。こちらの現場へくる前にお会いしてこようと思ったんですが、本社へ顔を出したときはお留守でしてね」

「聞いたよ。そのうち出てこないか。仕事に熱中するのもいいが、たまには街の空気も吸わなくっちゃな」

「はい。そちらもお変わりありませんか」

「相変わらずだよ。味気ないほど、相変わらずだ」

その時、霞は思わず、あ、とちいさな声を洩らしてしまつた、配島と話しているうちに、彼の自宅の書斎の壁にかかっている奈良の興福寺の阿修羅像の写真が、不意に頭に

浮んだのである。

誰かに似ていると思っていたら、眠る女は、その阿修羅像に似ているのであった。

二

不意に、あ、と声を洩らしたきり、口を嚙んでいた霞の耳を、

「……なんだ。おい、どうかしたのか」

という配島の声が搏ってきた。

それが、思いがけなく緊張した声で、受話器がぴりぴりと震えたような気が、霞にはした。

「いや、なんでもありません」

「そうか、そんならいいが……その窓から現場がみえるだろう」

「ええ、よくみえますよ」

「きみは斎木の机の角に尻を半分のつけて、窓から現場を見下しながら話している」

霞は、実際そうしていた。それがまるで東京の本社から

みえているかのように、配島がそういうので、霞はちょっと驚いた。

「その通りです。よくわかりますね」

「十五年も、伊達に現場のめしを食ったんじゃない。現場のことなら、ここにいっても手に取るようにわかる。きみがいま、斎木の机から尻を外したこともな」

霞は、苦笑した。配島は、いまは課長の椅子に腰を落着けているが、六年ほど前までは現場の鬼といわれていたベテランのエンジニアである。

「だから、話の途中で」

と、配島は言葉をつづけた。

「急に変な声を出されたりすると、びっくりするんだ。現場でなにか起ったのかと思う」

「そんなことはありません。現場は万事、順調ですよ。塗装が済んだばかりで、その色が雨のなかに大変鮮やかです」

「その雨は、いつから降り出したんだ」

「きのうの午ごろからです」

「川の水はどうだ」

「大分増水してますが、でも、心配するほどのことはありません。ちょっと待ってください」

霞は、配島に川音を聞かせようと窓を開け、耳から離れた受話器を、いつとき外の方へ向けていた。

「どうですか、きこえましたか」

「雨垂れの方がよくきこえるな。その程度なら、まあ心配ないだろう。ほかに、なにか変わったことはないな？」

霞は、正直に答えてもよかったのだが、眠っている女のことを話せば長電話になると思って、

「なにもありません」

そう答えてから、

「ところで、お宅の書斎には、まだあの奈良の仏像の写真が飾ってありますか」

と訊いた。

「ああ、阿修羅像か。だから、さっきもいったように、なにもかもうんざりするほど相変らずでね。……だけど、なんだい、急に、阿修羅像なんか持ち出して」

「いや、ひさしぶりにお声を聞いたたら、いろいろとお宅のことが懐かしく思い出されましたね。和歌夫ちゃんもお変わりありませんか」

「ああ。近頃、背ばかり、やけに大きくなりおってね。毎朝、一センチぐらいずつ伸びてみたいにみえる。薄気味悪いくらいだ」

霞が学生時代、初めて配島の家を訪ねたころは、一人息子の和歌夫はまだ幼稚園に入っただけだったが、いまはもう小学校の六年生になっている。

「そうそう、和歌夫といええ」

配島は思い出したようにいった。

「こないだ、橋のお兄さんは近頃ちっともこないねって、そういつてたよ」

「そうですか。そういえば、春にいちど邪魔したきりですからね。トンネルのお兄さんの方は、ちょいちょい現われるんですか」

「ちょいちょいというほどでもないが、先月の中頃だったかな、暑いさかりに、四国の田舎へ墓参りにいつてきた婦りだといって寄ってくれた」

「そういえば、橋場にももう随分会わらないな、と霞は思った。橋場大二郎は、霞とおなじ大学の土木工学科に学んだ仲間で、いまは青函海底トンネル工事で竜飛崎の現場にいる。

霞も、橋場も、大学ではバスケットボールのクラブに入っていたが、おなじクラブ員でも、この二人に、いまは亡い谷藤富男を加えた三人が、時折コーチにきてくれたクラブの先輩の配島の家によく出入して、家族同然に親しんで

いた。

そのころは、まだ配島の妻の満美子もいて、配島夫婦と息子の和歌夫、それに配島の母親の四人家族が、目白の高台の広い邸宅に住んでいた。まだ幼かった和歌夫は、三人の名前よりも先に、それぞれが目指している仕事の分野を覚えてしまった。霞は、橋のお兄さんであった。橋場はトンネルのお兄さん、谷藤はダムのお兄さんであった。

「橋場は、元気でしたか。奴にも、去年の夏以来、会っていないんですが」

霞はいった。

「元気だったよ。ふた晩泊って、坊主をナイターへ連れてってくれた」

「それじゃ、僕もここを降りたら、早速後楽園の切符を手に入れて、誘いにいきますよ」

「じゃ、そう伝えて置こう。そっちは、あとのくらいかかる？」

「まず、一週間つてとこでしょうね」

「一週間か……」

配島は待ち遠しそうにいった。

「まあ、いいだろう。髭を剃って降りてこいよ」

霞は、受話器を置いてから、京谷がいつのまにか作業服に着替えて事務所に戻っているの気がついた。京谷は、帰りに甲府あたりから土産に買ってきたのだろう、葡萄の籠を机の上に置いて、斎木と二人で食べていた。

「やらないか」

「葡萄か。初物だな」

霞は籠から、一と房つまんだ。

「まだ眠ってたか、あの娘」

「相変らず昏々とおやすみだ。今夜は、どうやら諦めた方がよさそうだな。俺は、もう志村に予約してきたよ」

「寝床をか。手まわしのいい奴だな」

志村というのは、この春、高校を出たばかりの少年社員で、京谷が今夜もぐりこませてくれよと頼むと、僕がよそへもぐりこみますからベッドはどうぞ御自由にと、志村はそういったという。

「人徳だな」

京谷が自分でそういうと、

「……あんなこといつてる。志村君の方がよっぽど賢明ですよ」と斎木がいった。「こんな図体の先輩と、一緒のベッドにちいさくなって寝てさ、雷みたいな騒でもかかれた日には、生きた空はないからね」

霞は、葡萄を一粒ずつ、機械的に口に運びながら、今夜は誰の寝床へもぐりこもうかと考えていた。霞はもともと、枕が変れば眠れないなどという繊細な神経は持ち合わせていないが、それかといって、相手を選ばずに誰のベッドでもいいからもぐりこんでやろうという気にはなれなかった。

「長い電話だったな。あの娘のことも話したのか」

京谷がいった。

「話さなかった。話せばもっと長電話になるからな」

「おまえ、あの人には、なんでも洗いざらい話すんじゃないかったのか」

霞は、ちょっと京谷の顔をみた。

「あの入って、電話の相手がわかるのか？」

「わかるさ。配島課長だろう？」

斎木から聞いたのだろうと思ったが、京谷はそうではないといった。

「そんなことぐらい、人に訊かなくなつたって、おまえの顔をみてればわかるよ」

「俺の顔？ 俺がどんな顔をしていた」

「なんとも寛いだ、穏やかな顔をして喋ってたよ。配島課長と電話で話してるときぐらいだな、おまえがそんな顔をみせるのは」

霞は、自分の顔のことなのに、なにか物珍しいことを聞くような気がした。霞は、髭を剃るとき以外は、鏡というものに自分の顔を映してみたことがなかった。まして電話をしているときの自分の顔など、想像してみたこともない。「それじゃ、普段はむさくるしい顔をしているというわけか」

「むさくるしいというほどでもないが、まず、甚だしく無愛想ではあるな。それが一番ひどいのは、若くて綺麗な女の子がそばにいるときだ」

霞は、思わず苦笑した。そうかもしれないと思い当るふしがあるのだ。

「腹が立つてくるからな、俺は」

と彼はいった。

「どうして腹なんか立てるんだ、新鮮で美しいものを眺めているのに」

「俺は腹を立てるつもりなんかないんだが、腹の方で自然に立つてくる、不思議に。どうしてだかわからないな。そんなことは、考えてみたこともない」

「それじゃ、俺が分析してやろう」

京谷は、大袈裟に椅子を鳴らして坐り直した。

「おまえは女嫌いなんていわれてるけど、そんなことはな

い。世の中に、女が嫌いだって男は一人だっていやしない。おまえはむしろ、女の美しさや氣立てのよさに人一倍敏感な男だと、俺は思う。だけど、おまえの腹のなかには、自分のようになりふり構わず、ただ橋を作ることにだけ血道を上げているような男は、一生涯、こういう美しい女たちには無縁に過ぎてしまうかもしれないという思いがある。

美女と、橋と、どっちを選ぶかということになると、おまえは文句なしに橋を選ぶわけだ。文句はないんだが、やっぱり腹が立つんだよ。どう考えても自分とは縁のなさそうな美しい女ほど腹立たしい存在はないなんて、フランスの詩人がなにかで腹を立ててたけど、おまえもその口なんだ」

霞は、呆れたように京谷の顔を眺めていたが、やがて、「おまえ、そんなことを考えてるのか」

といった。

「考えるさ。まんざら他人事でもないからな」

と京谷はいつて、にやりとした。

「実をいえば、俺だって、いい女に腹が立つことがないわけじゃない」

「なるほど。じゃ、俺たちは、どっちも詩人ということになるな」

霞がそういうと、斎木が不意に、ぷつと噎おどせたように葡萄の種を噴き出した。

日暮になって、眠る女が、ようやく目醒めた。霞が屈けてやったセーターとスラックス姿で、ふらふらと部屋から出てきたところを、炊事婦の坂下かねがみつけた。かねは、手洗いまでつき添そっていった、また部屋のベッドまで送り届けてから、事務所へ相談に駈かけてきた。女は、軀からだがふらふらするほかは、べつに異状はないらしかった。

「でも、ふらふらするのは当り前ですよ。きのうの午後からなんにも食べてないっていうんだから。食欲があるようだったら、豚汁トン汁ぐらい飲のませていいんでしょねえ」

かねは、そういつて炊事場へ引き返していったが、しばらくすると、首をすくめて、職員食堂へわざわざ空になった井をみせにきた。

「ほら。べろりですよ。なんにもいわずに、涙ぐんで、飲んじやったの。おかわりっていうんだけど、構かまわないでしょねえ」

その夜、霞は結局、娛樂室の長椅子に眠ることにした。長椅子といっても、ただ細長いばかりの木の椅子だが、それをいくつか寄せ集めれば、ともかく固いベッドが出来る。

どうせ誰かのベッドへもぐりこんでも、一と晩、寝苦しい思いをしなければならぬ。その上、相手も寝苦しいだろうと氣を使うことになる。それよりも、少々固くても広いベッドに、手足を存分に伸ばして眠る方がいい。

京谷はさすがに氣の毒がつて、

「どうとう野宿か。俺のところへくるか？」

といったが、霞は、

「お互いに窮屈きうくつな思おもいをするのではないさ。あの娘むすめを俺のベッドへ運んだのは、俺なんだから。仕方がない」と断ことわった。

霞は、自分が今夜娛樂室で眠るということを誰にもいわなかったから、夕食後の娛樂室は、いつもの晩のように碁や将棋や花札をする者で賑にぎわった。霞は、就寝の時間がくるまで、誰もいない事務室で竜飛リウヘイにいる橋場大二郎に手紙を書いた。

学生時代は、いちども顔を合わせない日が一日もなかったほどだが、仕事が橋とトンネルに分れてからは滅多に会えなくなっている。きょう、本社の先輩と電話で話して、おまえさんの話も出て、懐かしかった——霞はそんなふうにしき出した。

相変らず雨がスレート屋根を叩たたいていた。